經濟論叢

第七十八巻　第五號

経済外的強制について……山岡亮一（1）

ヒルファーディングの帝国主義論(2)……静田　均（20）

過渡期経済の若干の諸問題について……金　鍾　碩（36）

運送貿易とイギリス海運業の確立……山田浩之（52）

〔昭和三十一年十一月〕

京都大學經濟學會

第七十八巻　三八〇　第五号　二〇

ヒルファーディングの帝国主義論（二）

静田　均

七

マルクス主義の理論体系に新しく『経済領域』(Wirtschaftsgebiet) という概念を導入し、かつそれを中心的な地位に据えたことは、オットー・バウアー (O. Bauer, Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie. 1907) の劃期的功績である、とハスヘーゲン (G. Hashagen, Marxismus und Imperialismus, Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. 113 Bd, 1919) はいっているが、ともあれヒルファーディングがバウアーからこの経済領域という概念をうけつぎ、それを彼の帝国主義論の重要な支柱としていることは、見逃しえざる事実である。

すなわちヒルファーディングによると、経済領域が大きくて人口が稠密であればあるほど、経営単位はいよいよ大きくなることができ、また経営内部における専門化もいよいよ盛んとなることができる。その結果、生産費は節約されて低下することは、いうまでもない。さらに経済領域が大きければ大きいほど、ますます最も立地条件の有利な地点に工場や作業場を選定することができるばかりでなく、社会的需要が大きいだけ、多種多様の生産を営むことができるから、それぞれの生産部門が互いに補い合って、外部からの輸入による輸送費を節減する試みが、ま

すます大きくなる。さらに需要の変遷や自然的災害による生産の攪乱は、大なる経済領域において、小なる経済領域よりも、いっそう容易にうめ合せをつけることができる。こう見てくると、『発達した資本主義的生産にあっては、全世界市場をうってただ一つの経済領域とする自由貿易こそ、最大の労働生産力と最も合理的な国際分業とを可能ならしめる』（『金融資本論』第二十二章）、といわざるをえない。

これに反して、『保護関税は経済領域の制限を意味し、従って生産力発展上の阻害を意味する』（同上）。というのは、保護関税は経営の規模を小ならしめ、その専門化を困難ならしめ、そしてついには、当該国が最も有利な前提条件を有する国際分業を妨げるような生産部門に資本を向けさせるからである。しかもこの傾向は、近代の高率保護関税において、ひとしお顕著である。なぜか。ヒルファーディングはいう、『その税率は多くは個々の産業部門の生産技術的地位を顧慮して確定されるのではなくて、むしろしばしば個々の産業階層間の政治的勢力争いの結果であり、結局のところこの税率の形成は、国家権力に及ぼす右の産業諸階層の勢力に依存するからである』（同上）。いずれにせよ、高率の保護関税は生産力の発展に、従ってまた産業の発展に大きな障害をもたらすことは、明かであるが、それにも拘らず資本家階級にとっては、利潤の昂騰を意味するから、彼等が保護関税を歓迎することは、少しも不思議ではない。

さてここで注意を促したいのは、保護関税と独占との関係である。関税の保護がなくても、独占化は進展することができる。いいかえると、独占化は必ずしも関税の保護を必要とするものではない。しかし保護関税がない場合には、独占化はよりおくれるか、あるいはその市場支配力はより不確実なものとなるであろう。さらには国際カルテルへの反抗の起る懸念もある（同上）。

かようにしてここに相反する二つの傾向が生れる。『一方で保護関税は、カルテルのために競争戦上における攻撃の武器を提供することによって、価格闘争を尖鋭化すると同時に、国家権力を背景とする外交的干渉によって競争戦における地位を固めようと試みる。他方、保護関税は国内カルテルを安定せしめることによって、国際カルテルの結成を容易ならしめる』（同上）。こうした二つの傾向の結果、国際カルテルは継続的な利益共同体よりも、むしろ一時的な休戦状態をもたらすにすぎない、とヒルファーディングは説く。

利潤の高さに対して有する経済領域の大きさの直接的意義は、カルテル化によって著しく強められる。保護関税は国内市場における販売で資本主義的独占に特別利潤を与える。ところで『経済領域が大きければ大きいほど、かかる国内販売もいよいよ大きく、……従ってカルテル利潤もまたいよいよ大きい。このカルテル利潤が大きければ大きいほど、輸出奨励金もいよいよ大なるをえ、従って世界市場における競争能力もいよいよ強大となる。そこで植民地熱に誘発された世界政策にいっそう積極的に手を出すと同時に、保護関税の障壁に取り捲かれた経済領域をできるだけ広大ならしめようとする努力が生れたのである』（同上）。

八

さて経済領域が大きければ大きいほど、また国家権力が大きければ大きいほど、世界におけるナショナルな資本の地位がますます有利となることは、容易に理解しうるところである。そこで『金融資本は、あらゆる手段をもってする国家権力の強化という理念の担い手となる』（同上）。しかるに歴史的に生成した国家権力の差違が大きければ大きいほど競争の条件はますます相違し、そして大経済領域が世界市場支配のために行う闘争は、ますます有望

となり、従っていよいよ苛烈の度を加える。金融資本が発展すればするほど、またこの金融資本が自国の資本のために世界市場のここかしこを独占しようとすればするほど、こうした闘争はますます尖鋭化せざるをえない。もしこの独占化の過程がすでに相当すすんでいるとすれば、それに応じて残された部分をめぐる闘争はいよいよ深刻となる。『かかる対立は』、とヒルファーディングは書いている。『イギリスの自由貿易制度によって辛うじて持ちこたえられたのだが、それは必ずや近き将来に行われるであろう保護関税への推移によって、異常な尖鋭化を経験せざるをえない。ドイツの資本主義的発展とその経済領域の比較的狭隘であることとの矛盾は、そのばあい異常に増大される』（同上）。というのは、ドイツの工業の発展は急テンポをもって進行するのに、その競争領域は突如として縮少されることになるからである。

それば かりではない。つぎの事情はいっそうこれを切実なものたらしめる。ドイツは歴史的な理由によってこれぞというほどの植民地を所有してないのにひきかえて、彼の最強の競争者たるイギリスやアメリカはいうに及ばず、もっと劣っているフランス、ベルギー、オランダのような国々でさえが尨大な植民地を所有しており、さらに将来ドイツの競争者となるであろうロシアもまた広大な経済領域を有しているということが、すなわちそれだ。ヒルファーディングは書いている、『まことにこの情勢たるや、それぞれその衛星国をも伴うところのドイツとイギリスとの間の対立を異常に尖鋭ならしめざるをえないし、またやがては一つの暴力的解決にまで押進むところのものである』と（同上）。われわれはここで第一次大戦前の急迫した国際的緊張を思い浮べなければならぬ。

以上のごとき推論が成立するにも拘らず、現実には暴力的解決に突入することなしに済んでいるのは、何ゆえであろうか。ヒルファーディングによれば、実は反対の阻止的要因に妨げられているからである。反対の阻止的要因

とは何か。ほかでもない。資本輸出である。『資本の輸出は、それ自身かような暴力的解決に抵抗する傾向を生む』（同上）。かくてヒルファーディングは資本輸出に関する彼の理論に最後の仕上げを施すのである。『産業的発展の不均等は、資本輸出の形態に一定の差違をもたらす。産業上立ち遅れた国、またはその発展のより緩漫なる国の開発に直接関与するものは、産業的発展がその技術的方面においても、はたまた組織的方面においても、最高の形態に到達した国々である。この部類に属するものは、なかんずくドイツとアメリカであり、つぎはイギリスとベルギーである。古い資本主義的発展を有する他の諸国は、工場設立という形よりもむしろ貸付資本の形で、資本の輸出に関与する。このことはやがて、例えばフランス、オランダ、また高い程度でイギリスの資本を、ドイツおよびアメリカの経営する産業のため貸付資本たらしめる結果を生む。かくしてここに国際的な資本の利益連帯への傾向が生ずる』（同上、傍点は引用者の附したもの）。たとえばフランスの資本は貸付資本として、南アメリカその他におけるドイツの産業の進歩を利益とするようになるといった具合に。こうした国際的協力は、資本の権力を異常に高め、他国の領域の一層急速な開発を可能ならしめ、容易ならしめる。

最後にヒルファーディングはいう、『金融資本の政策は、最も旺盛な膨脹と新投資部面および新販売市場の不断の追求とを意味する。ところで資本主義の拡大が急速であればあるほど、繁栄期はますます長く、恐慌はいよいよ短い。膨脹はあらゆる資本共通の利益であり、かつ保護関税時代においては、それは帝国主義的膨脹としてのみ可能である』（前掲書、第二十三章）。

九

資本輸出はそれを受容する相手国に対してどんな影響を及ぼすであろうか。ヒルファーディングの回答はこうである。

第一は相手国の市場の吸収能力を増大するということだ。資本輸出がまだそれほど重要性をもたなかった時代には、商品輸出に対する限界は、ヨーロッパの工業製品に対する外国市場の吸収能力であったが、後者は輸入国の現物経済的な、または一般に未発達な生産から生じた剰余生産物によって限界づけられていた。商品輸出国における工業生産の急激な膨脹は、商品輸入国の狭い消費力に逢着して、しばしば過剰生産恐慌を惹起した。イギリスにおける恐慌の歴史は、如実にこの間の消息を伝えている。それは特に繊維工業において顕著であった。ところが『近代的運輸組織の発展とともにはじめて変化が現われて、重点を鉄工業の上に移し、同時に新たに開かれた市場との取引は、単なる商品取引ではなく、資本輸出が関心事となるという方向にますます移って行く』（前掲書、第二十二章）。ヒルファーディングは資本主義の発展につれて、商品取引ではなく、資本移動こそが大きな意義をもつようになることに注意を喚起している。この点、ホブソンと異るところはない。

さて資本輸出が外国市場の拡大、商品の吸収能力の増進を結果するのは、いかなる理由にもとづくのであろうか。ヒルファーディングの説明はこうである。

まず貸付資本の輸出について見よう。新たに開かれた一市場が一〇〇万ポンドの商品を輸出する能力をもつと仮定せよ。商品交換において現れる市場の吸収能力は、やはり一〇〇万ポンドであるに相違ない。ところで一〇〇万ポンドの価値が商品としてでなく、貸付資本として輸出されるとすれば、どうであるか。資本輸入国は自力による貯蓄の形成を待たずして、たちどころに一〇〇万ポンドに相当するだけの商品を外国市場より調達することが可能

となるから、それだけ早く自己の産業の発展を実現することができるわけである。このことは何人にも理解しうるところでなければならぬ。しかしヒルファーディングの説明は、もっと複雑である。彼はいう、『この価値が商品としてではなく、貸付資本として、例えば国債の形態で、この国に輸出されるとすれば、新たな市場がその余剰の輸出によって自由に処分しうる一〇〇万ポンドの価値は、商品との交換ではなく、資本の利払いに用いられる。かくてこの価値が資本としてこの国に送られ、利子が一〇パーセントであるなら、この国にはいまやただ一〇〇万ポンドの価値が輸出されうるだけではなく、実に一〇〇〇万ポンドの価値が、そしてもし利子が五パーセントに下れば、二〇〇〇万ポンドの価値が輸出されうるのである』（同上）。果して現実の事態がこのように推移するものであろうか。わたしは大きな疑問を抱かざるをえない。

転じて産業資本の形態による資本輸出について見よう。ヒルファーディングによれば、『貸付資本の形態における輸出よりも遙かに大きな意義を有するのは、産業資本の輸出の作用であって、これがまた産業資本の形態における資本の輸出が、ますます大きな意義をもつに至る原因でもある』（同上）。というのは、この場合には資本輸入国に新しく資本主義的産業が移植されるわけで、それだけ生産高は激増し、その結果、市場を本来の狭隘な消費能力の限界から完全に解放するからである。

以上のような推理過程よりして、ヒルファーディングはきわめて重要な結論にわれわれを導く。『かくして』、と彼は書いている。『資本輸出は新しい市場の消費能力に起因する限度を拡張する。しかし同時に資本主義的運輸・生産方法の外国への移転は、この外国で急速な経済的発展、自然経済的諸関連の解消によるより大きな国内市場の成立、市場むけ生産の拡大を惹起し、従ってまた輸出されてさらにまた新たな輸入資本への利払に役立ちうる生産

物の増産を惹起する。植民地および新しい市場の開発は、以前はなかんずく新しい消費資料の開発を意味したが、こんにちでは資本の新たな投下は、主として工業の原料を供給する諸部門に向けられる』（同上）。

ところで資本輸入国の開発の速度は、第一に資源の存在量の大小に依存し、第二に資本の多寡に依存し、第三に労働力の供給量の如何によって左右されるわけだが、いまや資本の調達が資本輸入によって容易となるとすれば、さしずめ労働力の調達こそ大きな問題とならざるをえない。それは現地における先資本主義的生産関係の解体につれ、賃銀プロレタリアートを創出することによって可能とされるが、国外から賃銀労働者を輸入することによっても補給されうる。そしてそこに強制労働や『契約奴隷制』の生ずる間隙があるのであり、植民政策が持ち前の兇暴性を存分に発揮することともなるわけだ。『暴力的方法は、植民政策の本質に属するものであって、それがなくては植民政策はその資本主義的意味を没却すべきものである』（同上）。同時にそこには白人労働者と有色人労働者との闘争が展開され、事態をいっそう複雑化する場合が少くない。

単なる商品貿易の関係から投資関係に進展するにつれて、利害関係がはるかに重大性を増すに至ることは、明白である。『他国に鉄道を敷設し、土地を獲得し、港湾を築造し、鉱山業を開始経営するようになると、危険の負担は、単に商品の売買される場合よりも、いっそう大となる。かくて法律関係の未発達は一つの障壁となり、金融資本は暴力的手段をもってしても、これが克服をますます狂暴に必要とする。このことはやがて、発達した資本主義国と後進地域の国家権力との間の紛争をますます尖鋭ならしめ、またこれらの地域に対して資本主義に適応する法律関係を強要しようとする試み……をますます緊切なものとする。』（同上）。ヒルファーディングがここで強調するのは、資本輸出に伴う民族の抑圧の激化であり、その結果たるナショナリズムの擡頭である。それは『金融資本論』

の中でもとりわけ精彩に富んだ部分だといってよい。『新たに開発された諸国そのものにおいては、輸入された資本主義がもろもろの対立を昂進せしめ、民族意識にめざめつつある国民の、侵入者に対する反抗をますます鼓舞するのであって、この反抗は容易に外国資本に対する危険な手段にまで高まりうる。旧い社会的諸関係は完全に変革され、「歴史なき民族」の数千年来の農業的結合は破壊され、かかる民族そのものは資本主義的渦中に捲きこまれる。資本主義そのものは被抑圧民族に対し、漸を追うて彼等の解放のための手段方法を与える。かってはヨーロッパ諸民族の最高の目的であった目的、すなわち経済的および文化的解放の手段としての民族的統一国家の建設は、被抑圧民族にとっても目的となる。この独立運動はヨーロッパの資本をば、まさにそれの最も価値多き且つ最も見込ある搾取地域において脅かすのであって、このヨーロッパ資本はますますその暴力的手段を絶えず増加することによってのみ、その支配を維持しうるのである』（同上、傍点は引用者）。

十

つぎに資本輸出は資本輸出国の側にどのような反作用を及ぼすであろうか。

ヒルファーディングによれば、『資本輸出は諸外国の開発を促進して、その生産諸力を最大の規模で発展させる。同時にそれは、資本として外国に送られる商品を供給すべき国内の生産を増大させる。かくして資本輸出は、資本主義的生産の一つの強力な推進力となり、資本輸出の一般化とともに資本主義的生産は、繁栄と不況との循環が短縮され、恐慌が緩和されて現れるところの新たな疾風怒濤時代に入る。生産の急速な増大は、労働力に対する需要の増大をも産み出し、この需要増大は労働組合に幸いする。資本主義に内在する窮乏化の傾向は、古くから資本主

義の発展している諸国では、克服されたかのように見える。生産の急速な上昇は、資本主義社会の害悪を意識させないで、この社会の生活力について楽観的な判断をつくり出す』（前掲書、第二十二章）。

この点に関連して、実は一つの批判がある。いわく、ヒルファーディングは金融資本主義の寄生性、腐朽性を看過しており、そのかぎりでホブソンにくらべて一歩後退していると（レーニン『資本主義最近の段階としての帝国主義』第八章）。いうところの寄生性、腐朽性とは、なかんずく資本輸出に関連するものであって、それに伴うレントナー層の増大ないしレントナー国の成立を指す。たしかにヒルファーディングがかかる面に照明を与えていないということは、いえるかもしれない。しかしそうだからといって、これをヒルファーディングの致命的欠陥であると断ずることは、必ずしも妥当ではあるまい。彼が力点をおこうとしたところは、むしろ別の方角にあったと見ることができるのではなかろうか。すなわち彼にとっての中心のテーマは、資本主義的独占、金融資本の発達が資本輸出にいかなる変化をもたらしたかという問題なのであり、すでにレントナー化したイギリスやフランスよりもドイツに一層多くの力点をおいたと解せられる節があり、貸付資本の輸出よりもむしろ産業資本の輸出に、とりわけ資源開発のための直接投資に重要性を認めた、と解することができる。そうだとすると、レントナー化の問題は、ヒルファーディングにとって少くとも第一義的重要性をもたなかったことは当然であり、あながち責められるべきことではあるまい。なまじ寄生性、停滞性、腐朽性を強調しすぎると、金融資本主義の成熟はそれ自身の安楽死に導くという、ていのよい一種の自動崩壊論に堕する惧れすら多分にある。それをおもうと、ヒルファーディングが資本主義から社会主義への転換を説くに際して、客観的条件の成熟よりも、むしろ主体的条件の昂揚を強調していることは、大いに注目されてよいであろう。

元来ヒルファーディングはツガン・バラノフスキーの強い影響のもとに立っている。彼は社会の生産力が各種生産部門に適正な比例性をもって配分されるかぎり、総資本の再生産は円滑に進行し、何ら経済的行詰りに逢着しないと考え、従って恐慌の発生は各種生産部門に生産力が適正に配分されない場合にのみ発生すると主張する。しかもある生産部門におけるカルテルの成立は、隣接する他の生産部門に相ついでカルテルの結成を喚び起し、ついに全社会はカルテルの網の目によって蔽われることとなる。これ、彼の名づけた『全般カルテル』(Generalkartell) であって、資本主義発展の極致を具現するものにほかならぬ。同時にそれは、彼によると、社会主義の前夜を意味する。第一次大戦後にいたって、『金融資本主義』という表現を『組織化された資本主義』という表現におきかえたとはいえ、ヒルファーディングの思想の大綱は依然としてその命脈を保っている。が、それはいわゆる資本主義的計画経済の思想に通ずるものであり、資本主義の矛盾は、組織化ないし計画化によって克服されうる、というに等しい。だが、もしもそうだとすると、資本輸出や植民地への進出を統制することの可能性を結論として導くことさえできるであろう。

それはともかく、ある意味でツガン・バラノフスキーの亜流であるヒルファーディングは、いわゆる資本主義崩壊の理論 (Zusammenbruchstheorie) の支持者ではない。彼はむしろかえって否定する立場にたっている。彼によると、『経済的崩壊ということは総じて合理的な観念ではない』(前掲書、第二十五章)。資本主義の崩壊ということは、『政治的ならびに社会的崩壊』を意味するだけである。そうしてここにわれわれは、ヒルファーディングの特色を見出すことができるであろう。(H. Heimann, Wirtschaftssysteme und Gesellschaftssysteme. 1944 S. 176–177)。『保護関税とカルテルとは生計費の騰貴を意味し、企業者団体は労働組合の進撃に対する資本の抵抗力を増進する。軍備政策ならびに

植民政策は、プロレタリアートの負担すべき租税の重荷をますます急速に増加する。そしてかかる政策の必然的結果たる資本主義的諸国家間の暴力的衝突は、貧困の尨大にして急性的な増進を意味する。しかるに国民大衆を革命化しつつあるあらゆるこれらの力は、つぎの場合にのみこれを経済的改造に役立てることができる。すなわち新社会の創造者たるべき階級が、その意識内においてまず叙上の全政策とそれの必然的諸結果とを予見する場合、これである』（前掲書、第二十五章）。

十一

『金融資本論』は公刊の当時、同じ社会民主主義者の陣営に大きな反響を捲き起した。カウツキー、バウアー、ベルンシュタイン等はあいついで紹介の筆をとり、また批評の労を惜しまなかった。彼等は一面において心からの讃辞を呈すると同時に、他面その欠陥を指摘するにやぶさかではなかった。そのうちカウツキーの批評は、主として『金融資本論』の中に展開された貨幣論、恐慌論に関するものであり、傾聴に値する内容を含んでいるとはいえ、金融資本の経済政策には触れていない。バウアーはおおむねヒルファーディングに好意的支持の態度を示しながら、経済政策に関しては、最近ますます重要度を高めつつある国家独占＝国家資本主義を取り扱わなかった点に遺憾の意を表した。これに比べるとベルンシュタインの批評は、より精細に分析を試みたということができよう。それは貨幣・信用に関するものと貿易政策に関するものと、二つあるが、ここでは後者のみが問題である。われわれはその中から特に重要と思われる二つの論点を指摘しておこう。（E. Bernstein, "Das Finanzkapital und Handelspolitik," Sozialistische Monatsheft. 1911 Bd. II S. 947）

第一、ヒルファーディングの名づけた金融資本とは銀行資本ではあるが、実際には産業資本に転化しているところのものを指す。しかし、こうした意味の金融資本は、資本主義的に発展をとげた国々の一般的現象ではない。論より証拠、イギリスでは銀行と産業との結びつきは、何ら重要な役割を果していない。決定的な問題は、金融機関が産業の運命を左右するがごとき強力な影響を与えているかどうかという点にあるが、ヒルファーディングの主張するような事実は、発行業務を兼営するドイツの大銀行に特有の現象と見るべきであり、そのかぎりにおいてある程度の妥当性をもつことは認めうるにせよ、これを拡大して一般化することは危険である。金融資本による工業の支配という定式化は、現実から遊離した空疎な論理的思弁にすぎない、うんぬん。

要するにベルンシュタインは、ヒルファーディングの金融資本という概念そのものにいたく懐疑的であって、せいぜい特殊ドイツ的な現象にすぎないと論ずるのである。それはいくぶん素朴の感を免れないかもしれないが、今日なお多くの人々の脳裡を去来する疑問の表白だといってよかろう。

第二、前述のごとく、ベルンシュタインはすでに出発点においてヒルファーディングの金融資本という概念に反対を表明するのだが、ついで金融資本の寡頭支配は経済政策の趨勢を決定するというヒルファーディングの見解に対しても、すこぶる消極的な態度を示し、事実による裏づけを欠くものだと主張するのである。ベルンシュタインによると、それは『抽象から引き出した結論、論理的思弁という意味での理論』にすぎない。

詳しくいえば、諸銀行において代表される金融資本が経済政策を左右する点で決定的な役割を果すという命題を確立するには、ヒルファーディングがおこなったよりも遙かに強固な経験的資料を必要とする。現実の事態はそれほど簡単ではない。金融資本といっても、きわめて多くの頭数によって代表されるのである。ヒルファーディング

の理論によると、ドイツ大銀行の指導者は保護関税論者でなくてはならぬはずだが、多年にわたって有力な指導者であったジーメンスは、絶対的な自由貿易論者ではなかったにせよ、少くとも保護関税の撤廃のために尽した闘士であり、その後継者であるグウィンナーもほぼ同様であった。

およそ金融機関が大きくなればなるほど、種々の企業との間にますます深い関係をもつようになる。従って関税問題に関しても、利害関係がますます複雑となることは当然の帰趨であり、必ずしも悉く保護関税論に加担するとは限らない。近代の金融貴族はスペインの鉱山の持主であり、アメリカの製鉄工場の持主であり、ブラジルの農場の持主であり、各国の政府の債権者であると同時に、イギリスの農業者であり、またイギリスの事業会社の株主でもある。そういう場合、保護関税に賛成すべきか、それとも自由貿易を支持すべきか、正確に判断することは至難であろう。彼は一般の政治におけると同じように、貿易政策に関しても中立的な立場をとる、というのが実情であるに違いない。あるいはラインウェストファリアの重工業と特に深い関係をもつ銀行の場合は別だというかもしれないが、それは金融資本家が産業資本家に保護関税のプログラムを指図するのではなくて、むしろ産業資本家が金融資本家に指図するのである。決定的な発言をするのは、一つまたは多数の業種の特殊なインテレストであって、金融の一般的インテレストではない。金融資本が世界中の保護関税に対して一般的なインテレストをもつというヒルファーディングの命題は、個別的な現象を基礎として構成したものであって、その個別的な現象たるや、とうてい一般化された理論を担いうるものではない。金融資本は何ら統一的な実体を形づくるものではなく、産業は多くの分化したインテレストによって支配されているのであって、金融界の産業に投ぜられた資本にかの実体を附与するのである、うんぬん。

十二

第二次大戦後、『金融資本論』に対する再検討が行われつつあることは、まことに興味ふかい。東独版に附せられた解説の中でエルスナーは書いている、『金融資本の経済政策に関する第五篇は、本書の最良の部分に属する。ここでヒルファーディングは真のマルクス主義者として自己を確立した。それは単に科学的認識に到達しているというだけではなく、かかる認識をプロレタリアートの階級闘争に役立たしめている点に関する』と、（Das Finanzkapital, herausgegeben von F. Oelssner 1955, S. X ff.）。こうした評価に接するとき、ひとはいささか意外の感にうたれるかもしれない。なぜなら、第一次大戦以後、ソヴィエト・ロシアにおけるヒルファーディングの公定価格は、カウツキーのそれと同じようにすこぶる低く、『日和見主義者』、『社会ファシスト』等々のレッテルを附されていた筈だからである。ともあれエルスナーは、貿易政策に関するかぎり、ヒルファーディングに加えられたベルンシュタインの批判を不当とし、金融資本の発展の結果、自由貿易の古典的国柄であるイギリスにおいても、保護関税への移行を齎したことは、第一次大戦から第二次大戦にかけて見られる歴史的現実の示すところであり、これはヒルファーディングの見透しが正しく、ベルンシュタインの見透しが誤りであったことを立証したものだと結論づけている。こうしたエルスナーの批評は、しかし部分的批評たるにとどまり、ベルンシュタインの提起した疑問を全面的に払拭するものではない。

最後にスウィージーの所見について一瞥を投じよう。彼はヘルガルテンの著書の批評に関連して、ヒルファーディングに言及している。それによると、第一次大戦以前の『古典的帝国主義』の時代に関するかぎりは、『だいた

いにおいて、ヒルファーディング流の理論がきわめて適切にあてはまる。ハルガルテンの書は、そのことの最も有力な証左である』といいながら、それにも拘らず、『ヒルファーディングの理論は、普遍的な妥当性をもつものではない』ことを強調し、『彼の理論は両大戦にはさまれた時期には、それほどよくあてはまらない。……米ソ二大強国がまったく異った社会制度をつくりあげている今日の国際情勢を分析する段になると、ヒルファーディング理論の直接の有用性は、さらに一層限られたものとなるだろう』、と述べている。(P. M. Sweezy, The Present as History, 1953 Chap. 7、都留重人訳編『歴史としての現代』第七章)。

『金融資本論』は公刊よりこのかた、すでに約半世紀の歳月を経過している。いまではいうまでもなく立派な古典だ。古典はある意味で永遠の生命をもつ。しかし逆説的ないい方をすれば、どんな古典でも永遠の生命はもちえない、といえるかもしれない。時の流れには抗しがたいからである。わたしは特にスウィージーの批評の後半に同感を表することを禁じえない。(了)